

「万物の秩序から引き出されて」

松 本 勤

- 一 『孤独な散歩者の夢想』あるいは時間の消滅
- 二 進歩の時代の孤独者

はじめに

ヨーロッパの十九世紀は科学の時代であった。十九世紀フランスにおいてもっとも優位をしめていたのは、科学的実証主義であり、科学をモデルとして世界を合理的に関連づけようとする精神であった。世紀の末葉はべつとして、これにもっとも精力的に反対したのは、少数の文学者たちにすぎない。十九世紀の中ごろに、社会科学者の思考と文学者の思考、いいかえると、科学の精神が指示する社会的関係の内側の現実価値と、その価値を否

定する価値との対立は、ほぼ明瞭な姿をあらわし、十分な統合の視点をもたないまま今日にいたっていると思われる。

現代文学の読者にとっては、世界が人間のはりめぐらした関係の網の目のなかに入ってこないほうが、むしろふつうであろうし、また関係のもとにおかれた現実は、しばしば無意味な、価値をもたない生活の残滓にすぎないであろう。ホフマンスタールが、チャンドス卿に「何かある事柄を他との関係のもとに考えたり語ったりすることが、まったくできなくなってしまうたのです」と語らせたのは、世紀が変わったばかりの一九〇一年であった。作品におけるコンテクストを超えて、このことばを借用するならば、十九世紀は前世紀を継承して、たしか

にある事柄を他との関係のもとにおき、その関係の真実にゆゆるがぬ自信をもっていたのだ。

自己の経験を反芻し、現実社会の諸関係と交錯せしめて、独自のしかたで世界を関連づけながら、他方では、いっさいの関連づけられた世界の外に自分を置こうとした人に、ジャン＝ジャック・ルソーがいる。そこで、ルソーをひとつの起点として、十九世紀のヨーロッパ精神史を考えることができるであろう。この精神史の幅はたいそう広い。なぜなら、啓蒙思想や十九世紀の実証精神とはちがった価値意識の上に立ってはいたが、ルソーは、あるいは社会を否定的に関連づけ、あるいは肯定的な関連づけの原理を見出そうとし、晩年には全世界が自分に陰謀をたくらんでいるという仮説をたてることによつて、失われてしまった世界と自己との関係を回復しようとし、さいごに『孤独な散歩者の夢想』において、すべての関係からの自己離脱を宣言したからである。

晩年のルソーは、自分が「万物の秩序から引き出され (tiré... de l'ordre des choses)」しまったと感じて、「不可解な渾沌⁽²⁾」のなかに沈みこんでいた。だが、同時に彼は、孤絶の意識が深まるにつれて、現実の社会とは無縁な秩序をさぐりあて、『夢想』においては、「いわば万物の体系 (le système des êtres) のなかに溶けこ

み、自然全体と同化する⁽³⁾」ことの陶醉を書きあらわすことができた。このような闇と光の二重の構造は、十九世紀の孤独者の作品にも認めることができるであろう。

ルソーは、このように、世界を関連づける諸思想にながっていると同時に、世界にたいする異和感の底から社会意識の外へと潜航する孤独な作家たちともつながっている。このなかで、『対話』や『夢想』の系譜は、これまでもつともないがしろにされてきた。すくなくとも、現実価値に依拠する科学精神の側は、これを問題とすることができなかった。

わたしがここでとりあげようとするのは、もっぱらルソーのさいごの面であり、十九世紀作家としては、ネルヴァル、ボードレー、ドストエフスキーなどを予想している。とはいえ、彼らとルソーとのあいだに、影響関係をさぐりだし、実証しようとしているのではない。一八〇八年生まれのネルヴァルには、ルソーの影響はあきらかであるが⁽⁴⁾、ともに二一年に生まれたボードレーやドストエフスキーは、ルソーとの切断を明確に自認している。ふしぎなことだが、一般にルソーの系譜をひくと認められ、みずからも弟子と任じた人たちよりも、ルソーとの距離を確実に設定したこれらの作家のほうが、かえって深部において先人と似た陰影をただよわせてい

る。彼らは時代と自己との相関をルソーよりは明晰に見
とおしていたから、「万物の秩序から引き出されて」と
いうような受身の表現はしない。だが、彼らもやはり、時
代を支配していた世界を関連づけ価値づける秩序形式に
たいして、孤独な精神を対置していたのである。

そこで、このような精神のはたらきとその表現をめぐ
って、ルソーと若干の十九世紀作家とのあいだの気まま
な往還が許されることによって、たがい一方の光が他
方の精神の特性をてらしだすとともに、進歩と科学を標
榜した時代にあつて孤独者が投じた問題を、多少とも明
らかにしうるのではないかと思われる。もつとも、とり
わけ文学の領域では問題を普遍化しにくい性質があり、
それぞれの作家の個別的な精神の過程をつぶさにたどら
なければならぬことは、いうまでもない。以下は、こ
のような小数者をもつつみこむ精神史のための、簡単な
スケッチにすぎない。

ネルヴァルが、最初に狂気の幽愁のなかに捕縛された
のが一八四一年である。『オーレリア』の発表が五五年、
『悪の華』初版が五七年に出ている。ところで、この四〇
年代から五〇年代にかけて、合理的理性にもとづく社会
の再編成のための学問的アプローチは、ほぼ出そろった
とおもわれる。四二年に、コントは『実証哲学講義』の

出版をおえる。ブルードンの『経済的諸矛盾の体系、あ
るいは貧困の哲学』は、四六年である。また若年のルナ
ンが『科学の未来』を書き、理性が人類を組織し、さら
には神を組織するであろうと考えたのは、ちょうど一八
四八年であつた。二月革命の結果、ボードレルはいつ
そう彼の「スプリーン」のなかに閉じこめられることにな
つた。ドストエフスキーがペトラシエフスキーのグル
ープに接近したのは、一八四七年であり、逮捕されてシ
ベリヤに送られるのが四九年である。革命の余波をおそ
れたニコライ一世は、フリーエを信奉したペトラシエフ
スキー派にさっそく目をつけたのである。

(1) ホフマンスタール『チャンドス卿の手紙』(富士川英
郎訳)

(2) *Les Réveries du promeneur solitaire* (Pléiade,

995) 今野一雄訳 岩波文庫二二ページ。

(3) *ibid.* Pléiade, 1066. 文庫一一五ページ。

(4) ネルヴァルのルソーにたいする共感は、『アンジエリ
ック』や『シルヴィ』を一読し、ルソーについて言及さ
れたページでたちどまるだけで十分に理解される。さら
に、最近発表された *Le Carnet de Dolbreuse* (par
Jean Richer, Athènes 1967) においても、ルソーが三
〇年代のネルヴァルにあたえた影響をうかがうことがで
きる。(内村瑠美子「Gérard de Nerval の Le Carnet

de Dolbreuse について」、『フランス語フランス文学研究十五』参照。また、前掲書の序文のⅡ、参照）ネルヴァルと十八世紀との血縁は深い、その一つは十八世紀神秘主義であり、もう一つはルソーである。

一 『孤独な散歩者の夢』

あるいは時間の消滅

ルソーの晩年の作品、とくに『孤独な散歩者の夢』から、ネルヴァル、ボードレール以下の近代詩の世界へいたるかすかな小径を想定した人は、すくなくないかもしれない。マルセル・レーモンは、ひかえめに、保留をつけながらも、この道をたどっているし、フリーゴ・フリードリヒは、近代詩の世界の十八世紀における「理論上の序奏」として、ルソーとデイドロをあげている。デイドロについては、もっぱら彼の芸術理論における独創性、天才、空想力、美などの概念のあたりしさが示される。ルソーについては、「呪われた詩人たち」にさきがける、自己と世界とが融和しあえぬことを確信する精神と、これと共存して、主体の創造的能力によって現実と空想の区別をとりはらっていく「創造的空想力」が注目される。『夢』にかんしてフリードリヒは次のように述べている。

「晩年の作品『孤独な散歩者の夢』のなかで、ルソーは、自分がまぎれもなく現存しているという理屈ぬきの確信にみちた状態を表現することに成功している。それは、たんに機械的に継起する時間をはなれて、過去と現在、混沌と快適さ、幻想と現実をもちや区別しないような内的時間にひたりきったひとつの夢想状態である。内的時間の発見は、べつに新しいことではなく、すでにセネカ、アウグスチヌス、ロック、スターンなどがそれぞれ深い考察をおこなっている。しかし、内的時間にひたむきに沈潜しようとしたさいのルソーの抒情的集中、しかもこれが、自己をとりまく世界を敵視するような魂と結ばれていたということは、従来の哲学的な時間分析からはとうてい出てこなかったような力をきたるべき詩作にたいしておよぼし、その先駆としての役割をはたしたのであった。機械的に継起する時間、つまり時計は、技術文明の呪わしい象徴と感ぜられるようになり（ボードレールやそれ以後の多くの詩人たち、たとえばスペインの詩人アントニオ・マチャードなど）、内在的時間が、狭隘な現実からのがれようとする抒情詩の隠れ家となっていく⁽²⁾。

これに該当するのは、『第五の散歩』におけるピニエ湖畔での夢想の描写である。この情景にたいして、ル

ソールが自分でつけた説明の部分の一部のみを書きだしておく。このテキストに、デンマーク犬にたおされて気を失ったあとの目覚めの感覚、自分がだれかわからず、痛みも、恐れも、不安もなく、「すべては現在にあって、なにも思い出せない⁽³⁾」という『第二の散歩』と、植物採集のたのしみを語りながら、魂が自然全体と同化するのだという『第七の散歩』とが重なり合う。

「しかし魂が十分に強固な地盤をみいだして、そこにすっかり安住し、そこに自らの全存在を集中して、過去を呼び起こす必要もなく未来を思いわずらう必要もないような状態、時間は魂にとってなんの意義もないような状態、いつまでも現在がつづき、しかもその持続を感じさせず、継起のあとかたもなく、欠乏や享有の、快楽や苦痛の、願望や恐怖のいかなる感情もなく、ただわたしたちが現存するという感情だけがあって、この感情だけで魂の全体を満たすことができる、こういう状態があるとするならば、この状態がつづくかぎり、そこにある人は幸福な人と呼ぶことができよう。それは生の快楽のうちにみいだされるような不完全な、みじめな、相対的な幸福ではなく、充実した完全無欠な幸福なのであって、魂のいつさいの空虚を埋めつくして、もはや満たすべきなものをも感じさせないのである。(……)

このような境地にある人は、いったいなにを楽しむのか？ それは自己の外部にあるなものでもなく、自身と自分の存在以外のなものでもない。この状態がつづくかぎり、人はあたかも神のように、自ら充足した状態にある⁽⁴⁾。

ルソーは、象徴詩人のいうような心象世界の見者であったわけではない。だが、歴史的時間としての過去も未来もなく、したがっていつさいの生成の観念から離反した特権的な時は、ルソーにとつと同様に、十九世紀の詩人にとつても、恩寵の瞬間にほかならなかった。合理的な世界の解釈によって現実が狹隘に固められるほどに、物理的な時間や空間を超え出たもうひとつの世界が、貴重な価値となったのである。それは、かならずしも詩人たちのみのが占有するものではなかった。唐突なようだが、ドストエフスキーが語っている癲癇の発作の直前におとずれる至福感をおもいかべるとよい。「この瞬間あの時を超越する」という奇警な言葉の意味が何だか僕には判ってくるような気がするんだよ」と、ムイシキンはロゴージンに言った⁽⁵⁾。

(1) Marcel Raymond : De Baudelaire au surréalisme

(José Corti), Introduction

(2) フーゴー・フリードリヒ『近代詩の構造』(飛鷹節訳)

人文書院、二四—三〇ページ。

(3) *Les Réveries du promeneur solitaire* (Pléiade, 1005) 今野訳二七—三〇ページ。

(4) *ibid.* Pléiade, 1046—7 今野訳八七—八八。

(5) 『白痴』第二篇五章。

ビエンヌ湖畔におけるルソーの記述については、すでに多くの分析や解釈がなされている。わたしはいま、さきのテキストに立ちどまって、これらに何かをつけくわえようとは思わないし、時間論を試みる意図もない。さしあたり、物理的継起としての時間とそれに付随する運動を排除しようとする意識が、現実の諸関係からの離脱意識と相即していることに留意しておけばよい。われわれの日常は、社会の諸関係のなかにくりこまれており、この諸関係はたえず変動しながらあらたな関係をはらみ、過去から未来へとつながる。これらの関係のなかに自己を妥当性をもって位置づけよう人や、歴史的な時間のなかに十分な価値実現を求める人は、脱時間的な志向をもたないであろう。

ルソーにしても、『夢想』のような言語表現は、社会の内側での価値実現にたいする絶望と表裏して、はじめで可能になったものとおもわれる。それは、たとえば、サン・ピエール島の叙述について、『告白』と『夢想』

とを読みくらべるとよい。一読してあきらかなように、『告白』では、作者の内面の獲得は、まだ説明的なふくらみしか持っていない。自分と社会とのあいだにもういちど橋をわたそうとし、そのために社会意識にとらえられているあいだは、サン・ピエール島の回想は純化して成熟しがたいのである。ところが、その『告白』も、いわゆる十九世紀小説風の自己と外界とを関連づけるといふ側面だけではとらえきれないであろう。なぜなら、この関連づけの内実にはいろいろ、時間と空間を統合しようとする作者の内面のはたらきを考えるならば、この自伝は過去の現実と往還しながらも、本質的には現実を超えていく内的時間と内的空間の発見、創造へとむかつており、ネルヴァルの『シルヴィ』にも近く、プルーストの圈内にひきよせられているからである。

時間の停止にかんしては、すでに『不平等論』の自然状態が歴史性・時間性を欠いていたことが想起される。たしかに、怨嗟のまなざしで人類史を関連づけた『不平等論』の眼と、『夢想』が現存の世界をとらえる眼とのあいだには、社会の転換にたいする期待の有無はそれぞれの時期で異っていても、その底にある共通項が存在することは疑えない。

さきのテキストにてらしていえば、ジャック・プルー

ストが指摘しているように、⁽²⁾「存在の感情」⁽²⁾がいかにいかなる感情ももたないという記述も、『夢想』の背後に『不平等論』の存在を推定させるに十分である。社会意識の外に出た『夢想』のルソーとは対照的に、「社会状態」の他者依存性を自己の内部にまで刻印された文明人は、「自分の外にあって、他人の意見のなかで」、「他人の判断によって自分の存在の感覚を持つ」⁽³⁾のであった。この対照はきわめて明瞭であるから、『夢想』の「私」は、意識の極限のなかから見出された「私」であるにもかかわらず、『不平等論』における社会的存在の対立者である「自然人」の前意識段階へと接近するのである。「欠乏や享有の、快楽や苦痛の、願望や恐怖のいかなる感情もなく…」(sans aucun autre sentiment de privation ni de jouissance, de plaisir ni de peine, de désir ni de crainte que celui seul de notre existence) という欠如態は、これらの感情の多くが『不平等論』では社会関係に付随すると説明されるから、これもまた『夢想』の「私」の脱「社会」性を語っているであろう。人間のうちから、社会的関係に由来するとおもわれる諸属性を、はぎとっていったのが『不平等論』であるとすれば、人間社会の構成員たる諸条件を、はぎとられたという意識の底から見出されたのが、『夢想』である。

両者の類縁はむしろ当然であるかもしれない。はぎとった極限に残った自然が、社会の悪を照らす光点であったように、はぎとられた極限に位置する私は、社会の価値を否定する価値となる。

『不平等論』の視角が重ね合わされるとき、『夢想』は前期ロマン派風の感傷的な風景を拒否して、受動的であるがゆえに能動的なひとつの精神として屹立する。

(1) Mauzi ; L'Idée du Bonheur dans la littérature et la pensée française au XVIII^e siècle (A. Colin), A. Béguin : L'Âme romantique et le rêve (J. Corti) Chap. XVII, Les Rêveries du promeneur solitaire, texte établi et annoté par M. Raymond (Pléiade) Introduction, R. Osmond : Contribution à l'étude psychologique des Rêveries du Promeneur solitaire (Annales XXIII), P. Grosclaude : Le moi, l'instant présent et le sentiment de existence chez J.-J. Rousseau (Europe, Nov.-Dec. 1961), M. Raymond: La rêverie selon Rousseau et son conditionnement historique (Jean-Jacques Rousseau et son oeuvre, C. Klincksieck) 等々

(2) Jacques Proust ; Le premier des pauvres (Europe 1961 Nov.-Déc. 16)

(3) De l'Inégalité, (Pléiade 193) 本田、平岡訳 文庫

じつさい、ルソーは自分のおかれた位置が比類のない、異様なものだと思っていた。「もと住んでいた惑星から落ちてきて別の惑星にいるようなものだ」と思っていた。しかも、『夢想』の作者は、ふたたび世界と私とを納得できるような関係において結びつけることは不可能であると認めてしまっていたから、いまいちど自己を語るにあたって、『告白』の方法も『対話』の方法も捨てざるをえなかった。そこで、彼はつぎのように語っている。

「こんな奇妙な境遇は、たしかにこれを検討し記述するだけのねうちがある。そこではかならずこの検討にわたしは晩年の余暇をささげるのだ。これに成功するには、順序と方法をもってしなければならぬのだらうが、そういう仕事はわたしにはできないばかりでなく、それは、わたしの心の移り変わりと、そのみちすじを明らかにするという目的から遠ざかることにもなる。わたしは物理学者が日々の気象状況を知るために大気について行なう実験を、ある意味でわたし自身について行なうのだ。わたしは自分の魂に晴雨計を用いてみる。そして、この実験がうまく行なわれ、長期にわたって繰り返

し行なわれるならば、それは物理学者の実験結果と同様の確実な結果をもたらすだろう。だが、わたしはそんなところまで計画をひろげはしない。実験記録を作成することで満足して、それを体系にまとめるような努力はない」。

ルソーの晴雨計がなにを記録しようとも、それはもはや現実社会の価値とは別の内容を示すはずである。現実の世界の秩序から、なんらかの別の地点へと移行する自己の内部に気象台を設けるといふ文学観は、ネルヴァルにもボードレールにも見出される。「夢の现实生活への流入」を記述するさい、ネルヴァルはつぎのように書いている。「作家の使命というものは、人生の重大な状況下で体験することを、真摯に分析することにあるのだと考えるのでなければ、また、自分には有益と思えるある目的を心に抱いていなければ、私はここで筆を止め、ことによると正気を失ったといえるかもしれない。また俗に病的といわれる一連の幻覚の中で体験したことを、ひきつづいて描写しようなどとは試みないであらう」。

ボードレールの『アシージュの詩』は、つぎのようにはじまる。「自分自身を観察することを知りそしてまた自分の受けた印象を記憶する、つまり、 Hoffman のように、自らの精神の気圧計を設計することができる人びと

は、時としてかれらの思想の氣象観測所で、心地よい季節や、幸福な日々や、あるいはまた楽しい時刻について、記録しなければならなかつたはずである。(……)

精神の世界が、新しい輝きに充ちた広大な眺めをくりひろげる、こういう無上の歓びは、残念なことにめつたになく、そのうえまた束の間のものだが、たまたまそれに恵まれた人は、自分がいつもより芸術家であるとともに正しい人間であることを、要するに平素よりいっそう高貴であることを、感じるものだ。精神と感覚とのこの例外的状態は、誇張なしに樂園的と呼んでいいものだが、これを平凡な日常の生存の重い闇と較べてみて一番奇妙な点は、それを生みだす原因としてはつきり認め簡単に決定できるようなものが、何一つないことだ。⁽⁴⁾

ルソーは、すでに固定されてしまった奇妙な境遇(situation)と語り、社会の外にでた自分のうちに氣象台を設けようとした。ボードレルは、いかに「世界の外へ」出ようとしても、すべては世界の内にしかありえぬと知っている。にもかかわらず、「日常の生存の重い闇」から、樂園をのぞんで意識の飛翔をくりかえすのだ。樂園は近代の「恩寵」であって、ここでは「時間の觀念も消え失せ」て、「人間が神に移行」する。⁽⁵⁾ ルソーもまた、彼の「深淵の底で」、「あたかも神そのものよう

に不感不動の境地⁽⁶⁾」であると語った。しかし、ボードレルの樂園は、人工の天国である。これによって、文明にたいするルソーとボードレルの位置の差が明瞭である。⁽⁷⁾ ルソーが植物と交感したのにたいして、ボードレルの『パリの夢』は、植物の類は取り除き、金属と大理石と水とをめぐらせ、その風景は恐るべきであり、かつ魅了してやまぬという。

(1) Réveries 999 (今野訳十七)

(2) *ibid.*, 1000 (十九—二〇)

(3) Aurélie, *Périade*, 364 (稲生水訳)

(4) *Paradis artificiels. Périade*, 347, (安藤次男訳人文版全集九三) ボードレルは、『個性増加の手段として、葡萄酒とアンシーシュの比較』においても、ホフマンの気

圧計について述べ、計器の目盛りをつぎのように紹介している。「寛大によって和らげられた僅かに皮肉な気分、深い自己満足を伴った孤独な気分、音楽的陽気さ、音楽的熱狂、音楽的嵐、自分でも堪えがたい嘲弄的な陽気さ、自我を脱出したい熱望、極端な客観性、わが存在と自然との合体。」(*Périade* 324—5 全集一九九) ホフマンが十九世紀中葉のフランスやロシアの作家にあたえた影響は大きい。ルソーとボードレルやドストエフスキーなどの関係を考えるさいには、あいだにドイツ・ロマン派を置いてみる必要がある。たとえば自我の分裂相の表現として、ルソーの『対話』—ホフマンのドッペルゲンガー—ドストエフスキーの『分身』、など。

(5) *ibid.*, *Péiade*, 340 全集二二三。

(6) *Réveries*, *Péiade* 999 (今野訳一七)。

(7) 『アシーシュの詩』の「神人」(L'Homme-Dieu) という標題をもった章のなかで、ボードレールは「つまりジャン||ジャックは、アシーシュも服まずに酩酊していたわけである」と書いている。(Péiade 382) このボードレールの断定に、『地下生活者の手記』におけるドストエフスキーのルソー批判を重ねあわすとよい。これについては、松本勤『ルソーとドストエフスキー』(桑原武夫編『ルソー論集』所収) 参照。

二 進歩の時代の孤独者

孤独者が、自己を孤独と定位するまでには、さまざまの過程があるとおもわれる。はじめには、おそらく、外界とのあいだに、なにかなじめぬ、しっくりしない、不適合感がある。物も人も世界の関係のなかに定った位置をもつと考えられているばあいには、対象にはふさわしい呼び名があたえられて当然である。ここでは、物や人を指示するのは、もっぱら名詞であり、その指示をたすける代名詞である。ところが、たとえばドストエフスキーになると、重要な局面において人物の意識にかぶさってくるのは、しばしば不定代名詞でしかあらわしえないものである。⁽¹⁾ 誰かが、何かが、突然、何かをする、と映じるので

あって、外界は整理され、それと指示され確定された座標のなかに位置しない。このような原感情は、表現形態は時代と作家によってことなるが、孤独の文学のいつにかわらぬ起点であろう。原感情のままに浮遊しているのは不安であるから、われわれはこれに説明をあたえ、不定代名詞を名詞化しようとする。

われわれはふつう、社会が課しわれわれも協力している説明の網をもっていて、体験をこの中にはめこみ、自己と外界を関係づけながら生きていく。世界は、おそらくわれわれをとりまく何ものであるにすぎないが、この網の目をとおして、そのような、あるいはこのようなものとして現前している。だが、この説明軸は、ふつうは意識の中で十分に捕捉されてはおらず、全体的な意味と機能を明らかにしてはいない。慣れによって、おのずとそれにしたがっているのである。ところが、異和のベールを通して名詞化の過程がたどられるときには、網の目もまた対象化され、それによって世界は、価値の色彩をおび、主張をもち、人間によって整理され、関係づけられた世界としてあらわれる。われわれがただ対象にたいして未知であったにすぎないばあいは、知識の獲得によって充足し、説明の体系を自分のものとするであろう。しかし、原感情の底に説明体系とあいられないなにかがあ

って、それが価値意識として成長してくると、人は説明軸によって関係づけられた世界と対立せざるをえない。

ある時代のある社会は、それぞれに固有な共通の知識、共通の思考法、共通の言語をもっていて、それにしたがって世界を関連づけるようにと、われわれに要請している。これにたいして、孤独者の「私」は、共有された理解にたいするひとつの態度としてあらわれ、彼の批判は、共有された理解の網の目を批判し、これを相対化しようとする。ある個人の孤独の質を左右している変数はたいそう多いが、その一つとして、このような時代の支配的な思潮をあげることができる。それは、現存の社会を容認する見方ばかりではない。十八世紀以降は、既存の信念体系に対抗してあらたに世界を関連づけようとする試みも、つねに時代の有力な思潮として渦まいていた。近代の孤独者は、これらの共有された了解にたいする思想的反抗をへて、自己の位置を社会から離反したものと認めるにいたる。

孤独者が時代の共通知を拒否すれば、拒否された側では孤独者を社会生活に失格した不適応者であると診断するのが常であった。孤独な意識は、特殊な個人的条件や社会関係から決定論的に解釈され、それでかたがついてしまうのであった。ところで、この判断もまた彼らが普

遍的だと信じている彼らの関連づけからなされているのであるから、それぞれの時代の思考がなぜ孤独者にたいしてひややかであったかを問う視点も用意しておかねばなるまい。その方が、照明は孤独者のみならず、社会の科学にもむかい、したがってそれを支えていた時代の精神にもむかうから、はるかに公平というものである。私たちは、社会からの離反の意識がみずからの不安をどのように表現し、またその対極に何を置いたかをたどってみようとしているのであるが、そのまえに右のような両者の対立の構図を多少とも考えておきたい。

(1) ドストエフスキーにおける、突然とか不意にとかいう語と不定代名詞の結びつきについては、新谷敬三郎『分身』について(「ヨーロッパ文学研究」早稲田大学、第十七号)参照。

すでに触れたように、十九世紀フランスにおいて、世界を関連づけて考えるさいのもっとも一般的な基軸となつたのは、科学的実証主義であり、進歩の精神に支えられた歴史主義であった。今日、ユートピア思想家とよばれる人びとも、やはり科学主義を標榜しているのである。科学によってユートピアを発見しようとしたのであった。社会はある法則性をもって進展しており、法則性の認知が市民社会の矛盾解決につながると、一般に考え

られていた。一八四六年五月に、プルドンはマルクスにあてた手紙で、「社会の諸法則と、これらの諸法則が実現される様式と、進歩——進歩にしたがって、われわれは諸法則を発見するにいたる——を、ともに探求しようではないか」と書いている⁽¹⁾。

諸法則の発見は、プルドンにとっては、進歩とバラレルの関係におかれている。これらの法則は社会のなかに存在しながら、隠されているのだから、覆いを取りさることによって、正しい社会の原則が示され、歴史的現在の位置がてらしだされるであろう。

コントはすでに彼の初期論文で、「神学的・形而上学的政治が発明するものを、実証的政治は発見する」のであると説いている。存在のなかに価値は内蔵されており、われわれはそれを発見すればよい。そこで、彼のいう実証的政治は検証可能であり、「観察によって完全に判定可能⁽²⁾」である。コントの社会学は、数学から生物学にいたる自然科学をモデルにしている。彼にとって現実の危機は、自然の学問が実証的な段階に達しているのに、社会的な人間にかんする学問が、いまだに神学的あるいは形而上学的段階から脱していないところに由来するとおもわれた。自然を支配している法則があるように、社会を支配している法則があるはずであり、それは

歴史をつらぬいて、いはば必然的に自己実現をめざしている。したがって、要請されるのは、進歩の過程に協力し、調和的社会的実現を早めることである。

客観的実在のなから法則性を見出し、そこに価値をおくという観点は、自然科学の発展につれて近代ヨーロッパを支配するようになった考え方である。世界を関連づけて把握しようとする態度そのものは、時代を問わず、どのような社会にも存在したのである。未開社会には、それぞれに固有な世界の説明のしかたがあった。中世は神を最高存在として、価値秩序にしたがって、合目的々に存在が決定された。近代の特徴は、関係把握にあるのではなく、科学をモデルにしているところにある。存在するものは物質も、人間も、それ自体として認知されるはずであり、したがって、これらの総合である世界は、それ自体として関係をもっている。人間と物質をそのものとして認知し、それらの関係を発見するのが science の役目である。このような考え方が普及したのは、十八世紀であり、『百科全書』の序文などをみればあきらかなように、science は科学であると同時に学問そのものであった。一見、没価値的な思考のようにおもわれるが、それが価値認識をつつみこんでいたのは、背後に進歩の観念があったからだ。発見される関係は、と

うぜん妥当なものであるはずであり、その実現によって調和的な未来が期待しうるといふ共通理解があったのである。十九世紀中葉までの社会思想は、大きな枠組みのなかでとらえるならば、右の思考の系譜をついだといつてよいであろう。

個人をつねに社会との関係においてとらえようとするフランス的思考の伝統は問わぬとしても、社会的な価値実現と歴史をつらぬく法則性が信頼されているかぎり、流れにそむいて個体として状況離脱しがちであった少数の異端者は、科学と進歩の名のもとに切り捨てられてよい存在であった。一方、孤独な作家たちは、なによりも科学が指示する客観的实在の世界を、価値的に承認することを拒否した。少数者は、普遍的に名詞化されぬ原感情に執着しながら、独自の名詞化の作業を試みたが、彼らの名詞化世界は、客観的現実と同質のレヴェルでは展開されるはずはなかったのである。

(1) Proudhon : Oeuvres choisies, éd, par J. Bancal, Gallimard 1967 p.89

(2) 『社会再組織に必要な科学的作業のプラン』（霧生和夫訳 世界の名著 一〇四―五）コントはさらに次のように書いてゐる。「ちようど、太陽系の法則や人体組織の法則などについて人々が同意に達したように、しばらくたつうちに、まず有能な人たち、次いでその他の人た

ちも、文明進歩の自然法則、それから結果として生まれる組織について、ついには同意に達するにちがいない。」

十八世紀啓蒙主義においても、十九世紀の科学的実証主義においても、事実「存在」は価値「当為」と本質的には矛盾せず、等号で結ばれるべき関係にあった。ところが、進歩の思想を承認しなかった孤独者たちにとっては、この両者のたえざる離反はおしとどめることのできないものであった。すでに十七世紀において、パスカルは、物理学者として進歩の観念をみちびきだしながら、自然や社会にたいするどのような理解も、生存の意味をあきらかにはしないという観点を優位において、事実と価値の分離が人間にあたえられている条件だとみなした。十八世紀において、このような困難を背負っていたのは、やはりルソーであろう。

ルソーは人類の発展のあとをたどり、現存社会の虚偽と不当の理由をただしたが、彼にあっては、現実の虚偽や不当の理由の発見が正当で真正な未来の保証とはならなかった。そこで、彼は正当な社会構成の理論を提示するにあたっては、事実問題としてではなく、全くの権利問題として論をたてなければならなかった。だが、この妥当な社会の原理は、これまで社会をうごかしてきたと判

断される原理からは導かれぬ。さきにあげた「社会の諸法則と、これらの諸法則が実現される様式と、進歩の探求」というブルードンのことばを、かりにひきあいに出すならば、ルソーにおいては、彼が想定した社会の諸法則はすでに悪の側において自己実現を反復しており、その内部から善へ転化する契機が見出しにくいのである。『不平等論』は、円環的な回帰史観を示す点でマルクスの歴史観と似ているが、ルソーにはマルクスの労働に相当するような、人間の社会的発展と両立しうる価値源泉がない。生産力の発達についても、もとより、「比較」や「反省」などの理性能力についても、ルソーは懐疑と不信の念を捨てきれなかつたようである。

それにしても、ルソーには理想社会のイメージがあつたではないかという疑問は当然おこるであろう。政治や法の力を信じていた点で、彼は十九世紀の孤独者とは異なっているのだ。ここでは、疑問は疑問のままおいておくより仕方がないが、ルソーの人間観はもうすこし複雑であつたことを示すために、『新エロイズ』の終りの部分に触れておこう。衆知のように、この小説で作者はクラランを美德が支配する理想的な小共同体として描いている。ところが、このような理想もひとたび現実存在となると、人はまた不定形の渴望にさいなまれるのでは

ないか、そんな人間認識をジュリに語らせているのである。もしそうであれば、彼は現実から幻想へのたえざる上昇運動を、十八世紀において告知していたことになる。ルソー自身にてらしてみれば、この運動が彼を悲惨な方向に金縛りにしてしまったともいえる。

ジュリの白鳥の歌といわれる第六部第八信において、彼女はまずクラランの人びとを支配した透明な合体感情を語っている。しかし、義務にしたがい、美德をおもんじ、恋の情念をしりぞけて獲得された共同性の幸福を確かめたあとで、ジュリは、どこをみても満足の種ばかりなのにわたしは満足していない、わたしは不安で、何を望んでいるのかも分らずに望んでいる、と告白する。幸福が彼女を倦怠させ、そのために彼女は、かつて人生に認めていた価値を見失ってしまう。「そこでわたしの渴望する魂は、この世には十分なものを見つけないことができませんから、魂を充たしてくれるものをほかに求めるのです。」⁽¹⁾

こうしてジュリは、「感情と存在の源泉」である神へと上昇していくのであるが、ここではジュリの信仰の内容よりも、彼女を神へとおしやる動機の方が気がかりである。もっとも、ルソーは、所有する以前の期待、いいかえると想像力の自由な幻想が、人間の最大の慰めであ

るとジュリに語らせることによって、何も所有していない作者の慰めを語ったのかもしれない。以下は、ルソーと後代の文学との架橋を試みる批評家が、しばしば注目する文章である。「想像力は、所有したものについてはなにひとつ飾らず、幻想 (illusion) は享受が始まるところで終わります。この世で住むうちがあるのは、空想の国 (le pays des chimères) だけ。人間にぞくする事象はそれは空虚なものですから、自力で存在なさる神さまは別として、存在しないものの外に美しいものは何もありません。」⁽²⁾

(1) *Péiade*, 694

(2) *Péiade*, 693 プレイヤッド版に註記して、ギユイヨンはつぎのように書いている。「これは、憂鬱^{メラン}について、生の倦怠 (*taedium vitae*) について、欲望と退屈のダイアレクトックについて、恋の誕生における想像力の役割について、所有の幻滅 (*désillusion de la possession*) について、シャトールブリアンからブルーストやアメリカの小説家たちまで、十九世紀の小説家や詩人がおこなったあらゆる分析の源泉である。「わたしはこのなかの一語をとらえて、さらにベンヤミンの省察を付加しておきたい。「生の倦怠 (*taedium vitae*) に侵入してこれを憂鬱と化する決定的に新しい酵素は自己疎外である。ロマン主義において生の空間を、鏡のように、漸増的に大きな輪に拡大すると同時に漸減的に狭い枠のな

かに矮小化したあの省察の果しない後退から生ずる悲哀は、ボードレールにおいて、主体の自己自身との暗澹トシテ明晰ナ対話になった。」(『セントラル・パーク』円子修平訳)。

十九世紀の孤独者は、おしなべて時代をおおう進歩の思想を憎悪していた。ここでは詳述はさけるが、たとえば、ボードレールの終末論をおもいうかべるとよい。人間にあつては、ある部分が繊弱化し退化にしたがつて、他の部分が強化され発達する。機械の発達は人間を「アメリカ化」し、進歩は人間の精神的な部門を萎縮させてしまうであろうから、ブルジョア時代の人間の体内には臓物のみが肥大するであろう。ボードレールの「世界の終り」には、決着をつける裁きもなければ、破壊と混乱にみちたアナキーもない。人間がみずからそれによって生きると信じたものによって、臓物人間と化して滅びるといふ終末ほど、おぞましく面妖なものはあるまい。いちどはブルードンの思想に傾いたボードレールであったが、この正義と進歩の思想家にたいする共感を持続するには、彼の自己検証は、悪や憎悪において明晰でありすぎたであろう。晩年、「貧乏人を撲り倒そう！」の原稿の末尾に、彼は「どう思ふかね、市民ブルードンよ」と書き加えている。ボードレールのブルードンにたいする関係は、ドストエフスキーのチェルヌイシェフス

キーにたいするそれをおもわせる。

進歩の思想や社会主義にたいする反感と表裏して、政治の時代の孤独者たちは反時代的な貴族精神や神秘的な宗教思想に近づいていく。ドストエフスキーの偏狭な民族主義については、『作家の日記』を読めばよい。ボードレールは、「私はものの考え方を、ド・メーヌ、ストル及び、エドガー・ポーからまなんだ」と書いてある。前世紀のルソーにしても、晩年の一時期には、自分の安全をはかる必要もあつたためであろうが、哲学者たちやかつての偶像であつた民衆よりも、むしろ大貴族や諸国の王にたいして好意的な発言をしている。もっとも、『夢想』を書くころには、意識の内部においてもどのような階層とも絶縁してしまつて、特異な孤独のふちに沈みこむこととなつた。

ルソーの思想は、もともと進歩主義とは異質であつたが、それでも音楽論争のころには百科全書派と手を組んで活動したものだ。ネルヴァルは、青年時代、革新グループに加わつてサン・ペラジの監獄に拘留されており、そのときの体験を書いた『政治』という詩がある。

ボードレールの二月革命にたいする熱狂は、五一年にデュポン論を書き、五二年一月になつても、まだ『異教派』という「芸術のための芸術」を痛罵する文章を発表

しているほどである。「文学は、よりよい雰囲気の中でその力を鍛え直さなければならぬ。科学と哲学との間に立つて仲よく歩むことを拒否するような一切の文学は、人殺しの文学、自殺の文学である、ということが理解される時も遠くはないのである。」これは、とにかくにも、まごうことなきボードレールの文章である。ドストエフスキーのペトラシエフスキー体験については、多言を要しないであろう。これらの信条と行動が彼らのなかでどのように沈澱しあるいは逆転されて、それぞれの孤独の洞窟がどのように掘り返されていったかを、一般的に語ることは、避けなければならない。おそらく、政治と文学の関係の複雑さは、ここからはじまる。

ヨーロッパ以外については問わない。ヨーロッパをおおう進歩の時代にあつて、現代を告知し、いまなお生命力を有しているとおもわれる文学者が、もっとも重要な創作活動の時期に、ひかえ目な表現をもつても政治の局面では進歩の陣営に背をむけていたということは、近代文学を考えるさいに避けてとおることのできぬ事実であろう。

- (1) Pléiade 全集Ⅱ三三八(傍点筆者)
 (2) Pléiade 全集Ⅲ三五〇

(未完)